

1) 支援内容

すべての事例に共通して提供された支援内容は、「生活訓練・生活支援」と「職業訓練」であった。生活リズムの確立やコミュニケーション上の課題から個別対応の必要がある事例については、総時間数における「生活訓練・生活支援」の割合が高かった。

平成21年度からは、作業場面における身体バランスや身体調整力への働きかけを目的として「作業療法」を導入したほか、

既存の職業訓練メニューとは別に作業体験の幅を広げることなどをねらいとして新たな訓練メニュー（郵便の仕分け・配達、清掃、ファイリングやコピー機の使用等を含む事務補助作業）を増やした。また、実際の職場において作業体験を積むことにより、現実的な就労イメージを形成することなどをねらいとして所外実習の導入を行った。

表2. 支援内容別時間数

	R1	R2	R3	R4	R5	R6	R7	R8	R9
アセスメント	2	2	10	5	5	1	3		5
生活訓練	159	126	202.7	128.5	103.5	26.5	64.5	18.5	13.5
職業訓練	1079	566	1818	244	1313	167	447	37	223
作業療法			26.5	14.5	34		17	2	5
所内実習	25	45	12						
所外実習			30		60		49		
就労支援	14	24.5	48.5		67		25		4
行事参加	25	2	11.5	4	30		10.5	7.5	
その他	5	6		1	1.5				0.5
計	1309	771.5	2159.2	397	1614	194.5	616	65	251

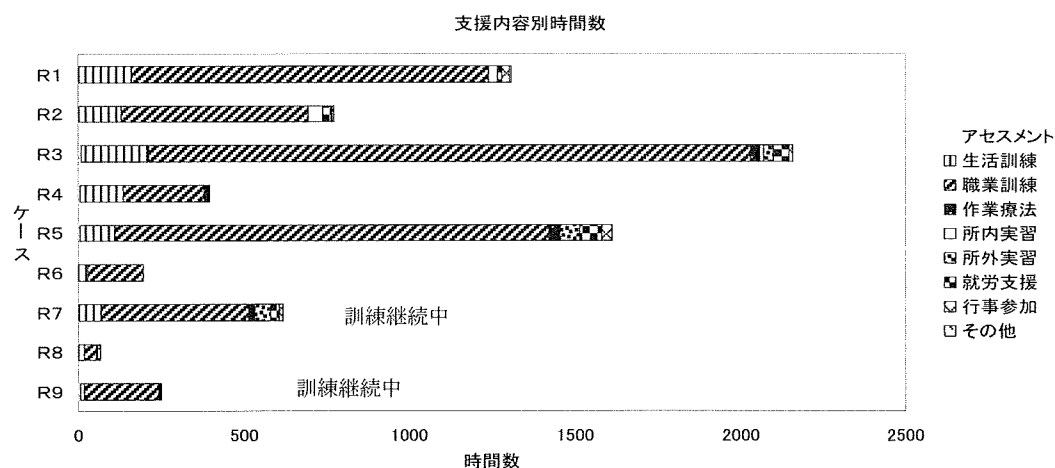


図3. 支援内容別時間数と割合

2) 支援結果

9名中7名については、更生訓練所における訓練を終了しており、2名が訓練継続中である。

訓練を終了とした7名の帰結に関しては、1名が国立職業リハビリテーションセンターへの入所、1名が短大進学、2名が就職、2名が就職活動継続であった。残りの1名に関しては、睡眠覚醒リズム障害の疑いにより専門医による診断・治療が優先されるべきという医学的な判断から訓練中止となった。

就職者に対しては、地域の支援機関と連携しながら、ジョブコーチの役割遂行を通して引き続き職場定着支援を行う予定である。

5. 各事例の支援概要（平成20年度に報告ずみの部分は除く）

1) R3

（事例概要および初期のアセスメント結果、支援課題は、平成20年度報告書参照）

（1）モニタリングと支援課題

① 本人・家族の要望

本人：働きたい（初期のアセスメント時には、「特に困っていることも、したいこともない」と発言）

家族：事務系の仕事で就職させたい（初期のアセスメント時は、「規則正しい生活をさせたい、できれば就職させたい」）

② 生活リズム

当初は、生活リズムの乱れがみられたものの、訓練に通うことで生活リズムは安定して保たれ、問題はみられない。

③ 健康管理・身辺管理面

a. アトピー性皮膚炎があり、長袖や長ズ

ボンを着用したがるが、服の下に手を入れて搔くなど状況が頻繁にみられたが、訓練経過の中で長袖、長ズボンの着用が習慣化し、服の下に手を入れて搔くことはみられなくなった。しかし、緊張すると、首などを搔くことが増え、その際に出血して作業中の物品を汚すこともあったため、注意喚起が必要であった。

b. 頻尿であり、特に緊張を強いられる場面になると、頻回にトイレに行く。また、通所時に尿失禁や便失禁がみられることがあるため、着替えの持参と駅等のトイレの位置確認、移動途中のトイレ使用の促しなどの支援が必要である。また、所外職場実習を契機に排泄動作やトイレの使用方法等についての支援も必要であることが明らかとなった。

④ コミュニケーション・対人行動面

挨拶は可能であるが、知った人を見つくと離れたところからでも挨拶をする。また、場面に応じて声量を調整することは困難であり、その場その場での支援が必要。

周囲の状況にかまわず、自分が関心のある話題を一方的に他者に話し続けることがあり、他の利用者とトラブルになることがある。また、主客逆転した言い回しがみられたり、独言が外言語化しやすく、周囲から誤解を受けやすい。

他者の話を聞く場面では、足を組んだり机に突っ伏すなどの行為がみられるため、その都度注意が必要である。

⑤ パニック、こだわり等

明らかな感覚過敏は認められないが、皮膚感覚がやや過敏であるため、冷たい金属部分をしっかりと握ることは苦手であり、そのために把持や操作が安定しない。台車の

操作時には、グリップ部分にカーバーをすると安定する。

自分なりの解釈やこだわりがあり、指示通りに取り組めないことがある。また、人によっても指示に従える場合と従えない場合がみられる。

⑥ 作業能力

a. 作業系職場体験訓練

生活体験が乏しいこともあり、新しい作業については口頭指示と動作モデルの提示が必要であるが、繰り返し体験を積むことにより、作業速度や正確性の向上が期待できる。

身体バランスが悪く、独特の歩容が認められるほか、作業時の力加減が調整できず余分な力が入ったり、手を離すタイミングがつかめず一見粗雑に見える動作となりやすい。作業後に、頸部痛や腰痛の訴えが聞かれることもある。

b. その他

集団で取り組む行事や作業、一定時間話を聞く場面への参加は、苦手意識が強く拒否的である。

⑦ 家族支援

困っているという切実感はなく、課題の共有化が図りにくい。

就労については、事務職など家族のホワイトカラー志向が強く、当初就職活動の方向性も定まらない状況であった。本人を主役として捉え、本人ができる、やりたい仕事を引き出しながら、家族に働きかけを行う必要がある。

(2) 支援内容

① 生活訓練・生活支援

一定時間、テーマに沿った話し合いを行うことを通して、会話時のマナーについて

支援を行った。

トイレ動作、公共の場面でのマナーについては、一般論ではなく所外実習や就労などを目標に据えた実際の場面で支援を行う方が効果的であった。

② 職業訓練

・パソコンの基本操作訓練

訓練指示は理解しているが、作業にすぐに飽きてしまい居眠りがよくみられるなど、作業意欲の向上がみられなかった。

・作業系職場体験訓練

パソコン訓練について、作業意欲の向上がみられなかったため、試行的に作業系の職場体験訓練を開始。訓練を重ねるごとに、作業意欲の向上がみられたため、パソコン訓練を中止し作業系職場体験訓練に移行。郵便発送準備作業、物品管理、コピー機、シュレッダー機の管理、郵便物仕分けと配達、簡易作業を実施した。

・所内実習（3日間）

図書室にて蔵書点検作業を実施。意欲的な取り組みがみられた。

・所外実習（10日間）

特例子会社にてクリーニングの補助的業務を行った。作業速度、集中力、社員食堂でのマナーや休憩時間の過ごし方などについて課題の指摘はあったが、遅刻欠席もなく仕事に対する姿勢については一定の評価が得られた。

③ OT

腰痛、頸部痛の訴えに対してストレッチ指導と、作業時の体幹バランスや力の調整などに対して働きかけを行った。

④ 就労支援

ハローワークから送付される実際の求人票に合わせて、求人票の見方や仕事の選択

の仕方について、具体的に支援を行うとともに、履歴書の書き方、面接時の応答練習、就職面接会への同行など、全般にわたって支援を行った。

⑤ 家族支援

就職面接会への同行など、家族も実際の場面に参加することを通して課題の共有化を図った。

(3) 支援結果

①作業系の職場体験訓練、②所内実習、③所外実習とステップを踏むことにより、作業意欲の向上が図られたとともに、漠然とながらも就労へのイメージが形成され、「働きたい」「作業系の仕事であれば自身があります」という発言が聞かれるまでにいたった。

訓練と並行して就職活動の支援を行った結果、特例子会社において作業系の業務（ドラッグストアでの仕分け、梱包、清掃等のバックヤード業務）での採用が内定した。今後、地域の支援関係機関と連携してジョブコーチ支援および職場定着支援を行っていく予定である。

訓練終了から就職までの期間が1ヶ月余りあいたため、就職に向けては短期間の再訓練を検討するなどウォーミングアップが必要であると考えた。

2) R5

(事例概要および初期のアセスメント結果、支援課題は、平成20年度報告書参照)

(1) モニタリングと支援課題

① 本人・家族の要望

本人：コミュニケーション力をつけたい。親に迷惑をかけず、働きたい（初期のアセスメント時は、「大学卒業に向けて卒論を作

成するための方法を学びたい」)

家族：技術を身につけて就職してほしい（初期のアセスメント時は、「就職は次のステップ、まずは大学卒業を目指したい。人との関わりが上手になってほしい」)

② 生活リズム

遅刻や欠席も少なく通所等には支障はないが、睡眠時間が極端に少なくなることがあり、作業効率が低下することがある。継続した支援が必要である。

③ 健康管理・身辺管理

睡眠時間や疲労感などを踏まえて自己コントロールすることは困難である。

包装紙やビニール袋などを始め物が捨てられないため、カバンの中や部屋の整理は苦手である。重要な書類などの保管管理にも支援が必要。また、数千円程度までの金銭イメージしかもっておらず、お金の使い方への不安がある。就労後に向けては金銭管理支援が必要。

④ コミュニケーション・対人行動面

簡単な指示は、口頭のみで理解可能であるが、複数の指示がある場合にはメモをとるなどの対処法が有効。

話したいことをあらかじめ箇条書きで洗い出し、優先順位をつけることで簡潔に話をするができるようになってきているが、優先順位をつける場所では支援が必要。

初対面の相手には過度に緊張し、瞬きもせず硬い表情で話をする。訓練場面では、後輩の利用者に対して職業指導員と同じ口調で指示的に話しかける、人との距離感がわからず、相手に至近距離で話しかけるなど、それぞれの場面で一つ一つ具体的に取るべき行動について支援することが必要。

異性とのつきあい方についても、周囲の一致した対応と環境面での配慮が必要である。

⑤ パニック、こだわり等

明らかなパニックはみられないが、慣れない場面では強い緊張状態がみられるほか、不安やイライラ感が高じると頭髪を無理矢理抜くなどの自傷行為がみられる。

インターネットへの依存性が強く生活リズムを崩す原因でもあったため、医師の指示によりパソコン操作は週末の数時間のみとした。その結果、パソコン作業をはずすなど、訓練内容と就職活動の方針の見直しが必要となった。また、ネット上での個人情報取り扱いに対する知識がなく、ネチケットに関する支援を必要とする。

物が捨てられない、自分で決めた予定行動を変えられないなどのこだわりがあり、生活リズムや身辺管理上の課題となることがある。

⑥ 作業能力

a. 技能習得訓練（クリーニング）

医師の指示により訓練内容をパソコン訓練からクリーニングに変更し、作業系での就職を目指す。作業は、動作モデルを提示することで学習は可能であるが、作業の段取りを考えて取り組むことは苦手である。また、未体験の作業に関してイメージがなく、失敗に対する不安も強いことから、何度も質問や確認をする。

同じ作業でも環境が変わると、周囲の状況から判断ができず、学習したことも活かせず混乱する。新しい環境では、休憩時間やその過ごし方についてもわからず、周囲に何度も確認したり、予定よりもかなり早く持ち場に戻ってしまうことが多い。

b. その他

生活場面での体験が非常に乏しく、日常的に使われる道具（はさみ、カッター、コピー機など）の使用法や郵便物の発送方法（宛名や差出人の記載場所を知らない、切手そのものを知らないなど）などの知識がない。日常生活の経験を踏まえて使い方を推測することも困難である。

⑦ 家族支援

家族とコミュニケーションがうまくとれず、孤立感、疎外感を強く抱いていることから、家族の障害理解に働きかけ、就労後の家族役割について共に考えながら支援を行っていく必要がある。

⑧ その他

訓練場面における職員や利用者など「他者」との関わりの中で「自己」を意識する発言が増えるとともに、苦手さや心理的葛藤を言語化して支援者に伝えようとする姿勢がみられるようになってきている。本人の認識変化に応じて、障害理解や自己理解に向けた心理教育が必要である。

(2) 支援内容

① 生活支援

ネチケットに関する支援、人との関わり方、異性とのつきあい方などに関して、理解が得られやすいように、要点を簡潔にまとめた教材を作成し、実際の支援場面で用いた。

② 生活訓練

重要な書類の保管・管理方法、メモの取り方、感情の適切な処理方法等について支援を行った。また、火気や道具の取り扱いなど未経験のことが多いことから、経験を増やすことをねらいとして、家事動作の一部を訓練に取り入れた。

③ 職業訓練

・技能習得訓練（クリーニング）

技能習得のほかに、集団作業による職場体験訓練としての性格ももちあわせているクリーニング訓練を実施。洗い場、プレス、アイロンなど、訓練ステップを踏みながら進めている。基本的なアイロン作業であれば、一定の速度で正確に仕上げることが可能。

・所外実習（10日間）

特例子会社において、洗い場を中心としたクリーニング作業に従事。訓練と関連した内容での所外実習であったが、慣れない環境や職場によるやり方の違いなどから、訓練での経験が活かされず、特に作業速度に関しては低い評価であった。

・その他

作業経験の幅を広げることをねらいとして、はさみやカッターを使用した開梱作業、段ボールなどの運搬作業、穴あけパンチを使用した書類のファイリング作業、台車等の取り扱い、集団による控室の清掃作業などを実施した。

④ OT

身体バランスや身体調整力の向上をねらいとして、全身運動、ストレッチを実施。また、重量物の持ち方、運び方などの支援を行った。

⑤ 家族支援

訓練状況、就労に向けての課題、就労マッチング支援の方針などについて、情報交換を進めながら、本人への対応方法などについて適宜助言を行った。

⑥ その他

自己理解のための振り返りの時間を設けて、心理教育的アプローチを行った。必ず

具体的なエピソードに即して、状況理解の整理をすすめるようにこころがけた。

（3）支援結果

実際の職場における所外実習を通して、慣れた環境である訓練場面では捉えきれない課題（休憩時間の取り方、場面が変化する毎の支援の必要性など）が浮き彫りになった。

それらの課題も踏まえながら、作業系求人を中心に就職活動の支援を行った結果、家電販売店（値札付けなどのバックヤード業務）での採用に至った。採用後は、ジョブコーチとして職場に出向き、職場定着に向けた支援を開始している。また、障害者就業・生活支援センターと連携した、長期的な支援体制づくりに向けて調整を開始した。

他の利用者や職員との関わりの中で、「自分の状況や障害を知りたい」という発言が聞かれるようになるとともに、「〇〇さんもうまくいかに辛かったのかな」と共感的な発言が聞かれる場面がみられた。

今後の課題としては、就労後の金銭管理支援や地域支援機関とも情報交換を進めながら不安などを安心して話せる場づくりなどの支援を進めていくことがあげられる。

3) R 6

（1）事例概要

普通高校卒業後、コンピュータ関係の専門学校を卒業。派遣社員として勤務した後、正社員として機械関係の会社に就職。その間は、寮生活を送っていたが、夜勤中心の勤務形態であったこともあり不眠などの症状が出現し、精神科を受診するようになった。家族と相談の結果、退職。実家に戻っ

た後、数社で勤務するもいずれも数ヶ月で離職している。その後、ハローワークの勧めで、家族が埼玉県発達障害者支援センターに相談に行き、そこからの紹介で当センター発達障害診療室を受診し、確定診断がなされるとともに、本研究登録となった。

(2) アセスメント結果と支援課題

① 本人・家族の要望

本人：コンピュータ関係の仕事で長く働きたい

家族：本人に合った職場で、長く働けるようになってほしい

② 生活リズム

昼夜逆転はなく、生活リズムは安定して保たれている。

③ 健康管理・身辺管理

決まった運動に取り組み、健康に心がけている。頻尿傾向にあるが、失禁はない。身体バランスや力の調整がやや悪く、静かに歩いたり作業を進めることが難しい。

一人暮らしの経験があり、最低限の身辺管理は可能であるが、社会生活を踏まえると、状況に合わせた衣服の選択、清潔感への配慮、書類や荷物などの整理や管理、約束時間に若干遅れるなど時間管理等に課題がみられる。

④ コミュニケーション

口頭での説明については、1回で理解することは困難。どこがわからないのか整理できず、相手にも遠慮してしまい聞き返すことができない。聞いた内容から情報の取舍選択ができないため、メモがとれない。

場にそぐわない発言がみられることもある。

⑤ パニック、こだわり

音に対する感覚過敏がみられ、大声や騒

がしい環境は苦手である。

指示されたことが理解できず、それが積み重なるとパニックになることがある。上司から声高に叱責を受けたときは、トイレに逃げ込むなどして、やり過ごしていた

趣味や嗜好に関してこだわりがみられるが、職業生活上大きな支障になることはない。

⑥ 作業能力

国立職業リハビリテーションセンターにおける職業評価が予定されていたため、アセスメントは未実施。

⑦ 就労移行支援のためのチェックリスト (要支援項目 5段階評価で3以下)

- ・援助を求めることができない
- ・自分の殻に閉じこもり、黙り込むなど、あまり感情が安定していない
- ・相手の動きにあわせることができない
- ・仕事の命令系統を理解していない
- ・仕事内容がわからないときに質問をしない、仕事が終わっても報告しない

(3) 支援内容

① 生活支援

訓練開始初日から、10分前後ながら遅刻が続いたことをうけて、約束の時間に合わせて逆算し、遅れずに余裕をもって行動するための手順を確認する支援を行った。

また、具体的な場面を通して、TPOに合わせた衣服の選択について支援を行った。

② 生活訓練

視覚的に月単位の予定を把握することで、約束事の重複を避け、予定遂行のための段取りを考えることをねらいとして、マンスリーのスケジュール帳を用いたスケジュール管理支援を実施した。

③ 職業訓練

地域障害者職業センターの助言もあり、本人は職業リハビリテーションセンターへの入所を希望していたため、調整を行いながら、入所に向けた申請等の手続き支援を行った。

職業リハビリテーションセンター入所までの間は、ビジュアルベーシックを中心に自習形式でパソコン訓練を実施した。

(4) 支援結果

職業リハビリテーションセンターに入所。導入訓練を経て OA ビジネスコースにて訓練継続中である。

4) R 7

(1) 事例概要

普通高校卒業後に、専門学校に進学し卒業。専門学校在学中に採用が内定した会社で研修期間として見習い業務に就いたが、接客業務がうまくこなせないなどの理由から本採用には至らなかった。アルバイトを経験した後、印刷工として就職するも、2年で退職。いずれも判断を求められる仕事がこなせなかったとのことであった。退職後、母親がハローワークにて埼玉県発達障害者支援センターの情報を入手し相談を行った結果、当センター発達障害診療室を紹介され受診。そこで、確定診断を受け、当本研究参加に至った。

(2) アセスメント結果と支援課題

① 本人・家族の要望

本人：人間関係でストレスを感じる事が少なく、長く働ける場所で働きたい

家族：本人の適性に合い、本人を理解してくれる職場環境、勤務内容で仕事に就いてほしい

② 生活リズム

訓練に並行して、以前から就いていたローテーション勤務による朝夕のアルバイトを継続しているが、遅刻や欠席もなく通所しており、生活リズムの大枠としては問題はみられない。しかし、睡眠時間が不足しがちであり、訓練時にボーとした様子やあくびが頻回にみられることがある。

③ 健康管理・身辺管理

特に、大きな問題はみられないが、睡眠不足や疲労の予防に対する認識は乏しく、非常に疲れていても遊びなどの予定行動を変更できない。

アルバイトがある日は、スーツを着用していることが多い。カジュアル服については同じものを数日にわたって着用していることが多く、実際汚れていても無頓着である。また、襟が中に入り込んでいても自分では気づかないほか、整髪などの身だしなみにも課題がみられる。

④ コミュニケーション・対人行動面

一見しっかりした口調と言葉遣いで話をするが、会話時にため息をついたりあくびをすることが多く、相手に不快感を与えたり相手から誤解を受けやすい態度がみられる。抽象的な言葉については、概念理解が伴わないことが多く、理解できなくても応答をしてしまうことが多い。そのため、指示されたことが情報として残らないことが多い。文字による指示、説明があると、理解が進みやすい。

しかし、口頭で指示されたことと視覚的に提示された情報を統合することができず、混乱することがある。

⑤ パニック、こだわり等

感覚過敏、パニックなどは認められない。自分の関心の高いこと（アニメ、鉄道）

へのこだわりが強く、趣味と職業選択について分けて考えることができない。また、本人にとって関心が高いことがあると、今取り組むべきことの優先順位が逆転してしまうことがある。

また、「自分には障害はないと思う」などの発言が聞かれることが多く、障害認識は極めて乏しいことから、得意な点と苦手な点を整理しながら自己理解の向上に向けた支援が必要である。

⑥ 作業能力

a. パソコンの基本操作

作業には多少時間がかかるものの、ミスがほとんどなく正確さは非常に良好である。作業速度も慣れてくると、速くなる。ワード、エクセルの基本操作はほぼ習得している。

課題遂行中、些細なことでも気になりだすと先に進めなくなり、作業が滞ることがある。

＜初期アセスメント結果＞

伝票並べ替え：19分/50枚

伝票チェック：204分/50枚

漢字の読み：80%

入力速度：260-320字/10分

数値エントリ：100%、75個/10分

データエントリ：100%(9/9)、6~7分/枚

b. 作業系体験訓練

道具使用などについての経験不足がみられるほか、作業全体の流れのイメージがもてず、取り組んでいる作業の意味が理解できない（宛名シール貼りや封入作業をしても、発送準備作業であることがわからないなど）。端をそろえる、適切な位置に穴をあけるなど、きれいな仕上がりに対し

て意識が向かない。不器用さが目立ち、力の調整が困難である。また、実際のミスは少ないにもかかわらず、過剰に確認行動をとるため、仕上がりまでに時間がかかることが多い。

作業時には、ロボットのようなぎこちない動きも目立つ。

⑦ 就労移行支援のためのチェックリスト (要支援項目 5段階評価で3以下)

- ・身だしなみがきちんとしていない
- ・金銭管理があまりできない
- ・自分の障害や症状を理解していない
- ・援助を求めることができない
- ・その場に応じた会話ができない
- ・相手や場に応じた言葉遣いができない
- ・表情やジェスチャー等で、コミュニケーションがほとんどできない
- ・人と共同して仕事ができない
- ・就労意欲はあまりない
- ・就労能力がわかっていない
- ・指示内容をあまり理解できない

⑧ 家族支援

家族としての支援態勢はあるが、確定診断後間もないことから、引き続き情報共有をしながら、家族としての役割等についても考える支援を進めていく必要がある。

(3) 支援内容

① 生活支援

チェックリストを用いて、睡眠時間や身辺管理の課題について共有しながら、具体的な行動目標をあげて支援を行っている。

② 生活訓練

スケジュール帳を用いて、アルバイト、訓練、就職活動、余暇活動を無理なくこなせるように、予定を視覚化するとともに、必要に応じてアルバイトの交代などのスケ

ジュール調整が可能となるように支援を継続している。

③ 職業訓練

・様々な作業体験

就労イメージを拡げることをねらいとして、パソコン入力、軽作業、クリーニングについて作業体験の機会を設定した。

・職場体験訓練（事務作業）

主として、ハローワークから送られてくる求人票のデータを入力する作業と伝票などを用いた事務作業を実施。

初めて実施した作業については、速度面、正確性など非常に低い結果であったが、2回目になると、大きな向上がみられる点特徴的であった（図4）。

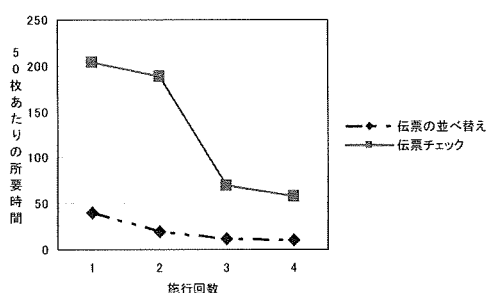


図4. R7 伝票課題における所要時間

・職場体験訓練（郵便仕分けおよび配達）

センターあての郵便物の一部について、仕分けから各部署への配達までの作業を担当。配達などの場面を通して、台車の操作方法、相手や配達時の状況に合わせた立ち振る舞い、言葉遣い、安全への配慮などについて、具体的にモデル提示をしながら支援を行っている。

・所外実習（7日間）

都内の企業において、主として再生用の古紙回収および再生処理前の分別作業を行った。遅刻、欠席はなく、通勤に関して問

題はなかったが、ビジネスカジュアルという服装のイメージがわからず、清潔感も含めてスーツ以外の適切な服装の選択が難しいとの指摘があった。作業中、溜息やあくびが多い、知っていることを何度も確認するなど、訓練場面と同様の課題がみられ、「働く」ことのイメージや動機づけの不足が指摘された。

職歴やアルバイト経験があるものの、これまで業務遂行上の課題について適切かつ明確にフィードバックされた経験がなかったことから、この実習体験は自身の苦手さや課題に向き合う初めての機会となった。

・その他

作業経験の幅を拡げることをねらいとして、はさみやカッターを使用した開梱作業、段ボールなどの運搬作業、穴あけパンチを使用した書類のファイリング作業、シュレッダー作業などを実施している。

集団作業として、日頃使用している控室の清掃作業を実施し、他者への配慮（他者の作業の妨げにならない）、協同作業（二人で荷物を持ち上げるなど）、作業工程チェック表の活用等の項目を取り入れて支援を継続している。

④ OT

作業の計画能力、巧緻性、体力レベル、柔軟性の向上への働きかけとして、軽作業や粗大作業を導入。実際に体験した作業については、向上がみられるが、般化がどこまでみられるかが課題である。

⑤ 就労支援

就労マッチング支援を進めている。また、就職面接会の見学、就職面接会参加企業への応募に向けた履歴書作成支援、面接の応答練習、実際の面接会への同行等の支援を

中心に行っている。

⑤ 家族支援

個別支援計画に基づき、説明を行い同意を得るとともに、適宜支援内容や支援経過についての情報提供、情報交換を行いながら支援を進めている。

(4) 支援結果

当初は支援課題が捉えにくい状況であったが、訓練や所外実習など体験場を増やすことにより、支援課題が明らかとなってきたており、本人の中で漠然とながらも気づきがみられてきている。引き続き、明らかとなった課題を踏まえて具体的な小目標を設定しながら、達成感もてるような訓練プログラム、支援を展開していくことが支援者側の課題である。

5) R 8

(1) 事例概要

中学2年時から不登校となった。中学卒業後、高校に進学するが、1年1学期で中退。高校中退後に精神科クリニックにて、確定診断を受けた。その後、国立秩父学園に通院。20代に入り派遣社員として店舗のバックヤードの仕事に就くが、派遣先が変わることや上司の叱責などを理由に1ヶ月足らずで退職した。その後は、社会的ひきこもり状態となっていた。本研究への参加検討のために、国立秩父学園から埼玉県発達障害者支援センター経由で当センター発達障害診療室を紹介され、本研究参加にいたった。

家族は、両親と同胞2名。同胞2名は、いずれも療育手帳を所持、特別支援学校高等部を卒業後就労している。

(2) アセスメント結果と支援課題

① 本人・家族の要望

本人：就労するために必要な訓練をして、できれば仕事がしたい

家族：まずは日中の活動ができるようになってほしい

② 生活リズム

訓練開始初日から、起きられないという理由により欠席がみられた。夜中にゲームなどを始めてしまい明け方まで眠れないなど、昼夜逆転の生活となっている。

時間に対する意識・関心が希薄であり、時間の組み立てには支援が必要。

③ 健康管理・身辺管理

服薬については、自己管理をしているが、時間観念が希薄なこともあり、指示通りの服薬が難しい。ひきこもり傾向にあり、外出機会も少ないなどから、1日の運動量が極端に少なく食事量も少ない状況。

歯磨きや入浴、身だしなみなどに無関心。

④ コミュニケーション・対人行動面

動作モデルの提示があり、具体的な指示内容であれば、指示理解は可能である。

抽象的な言葉の意味理解は困難であるが、その意味や状況を示すイラストや写真などがあると、理解が進みやすい。

興味や関心がある内容については、自ら話題をもちだしよく話すが、不安が強くなると言葉少なくなることが多い。しかし、他者に話を聞いてもらうことに対するニーズは高い。

⑤ パニック、こだわり

パニックはみられないが、独自の基準をつくり、その基準にこだわる面がみられる（週3日の訓練出席という目標を定めると、体調や気分如何にかかわらず欠席するなど）。また、電子機器などの新しい機種が発

売されると、高額であっても購入しないと気が済まない。ゲームやネット等への依存もみられる。

⑥ 作業能力

a. パソコンの基本操作

自らのブログを立ち上げており、パソコンは使い慣れているが、基本操作について系統立った指導を受けたことはない。

漢字の学習経験の不足もあり、読み書きが苦手であるため、漢字を使用する課題では作業意欲が低下する。

<初期アセスメント結果>

伝票並べ替え：22-33分/50枚

伝票チェック：未実施

漢字の読み：35%、

入力速度：60字/10分

数値エントリ：85-95%、50個/10分

データエントリ：60% (12/20)、10分/枚

b. その他

欠席が多いため、アセスメント未実施の部分が多い。

⑦ 就労移行支援のためのチェックリスト (要支援項目 5段階評価で3以下)

- ・決まった時間に起きられない
- ・規則正しい生活ができない
- ・決められたとおりに服薬していない
- ・体調不良時に対処できない
- ・金銭管理ができない
- ・自分の障害や症状を理解していない
- ・援助を求めることができない
- ・他人と協調できない
- ・感情が安定していない
- ・就労能力がわかっていない
- ・欠勤、遅刻などの連絡があまりできない
- ・欠勤、遅刻、早退が週に2~3度ある

・持続力の不足

・環境変化に対応できない

⑧ 家族支援

本人への対応方法がわからないことによる、不安がある。不安に感じていることについて傾聴しながら、対応方法について助言するとともに、家族と統一した対応が可能となるように日々の情報交換が必要。

(3) 支援内容

① 生活支援

本人より明け方まで寝つけず、午前中の訓練出席はつらいとの話があり、当面は午後からのみの訓練プログラムとして訓練を開始した。発達障害診療室担当医による服薬指導と並行して、本人と生活状況などについて話し合いながら生活リズムの確立に向けたルールづくりを行い、支援を行った。絵やイラストを用いると理解が促進されることから、ルールについては、絵やイラストを用いて表した。

年金の用途については、本人まかせとなっており、多くはゲームや電子機器の購入に使われていた。本人から、高額の新商品購入のためクレジットカードを申し込みたいとの相談があったため、クレジットカード被害の実例についてイラストを多用した資料を作成し説明を行った。その結果、クレジットカードの申し込みについては取り下げたいとの申し出があった。

② 職業訓練

生活リズムの確立が第一と捉え、作業場面を活動メニューの一つとして活用することをねらいとして訓練を実施する予定であったが、実際は欠席のため訓練実施にはいたらなかった。

③ OT

日中の運動量を増やすことをねらいとして、軽スポーツの導入を予定していたが、欠席のため訓練実施にはいたらなかった。

③ 家族支援

母親の不安やとまどいを傾聴。また、対応のわからなさについては、家族と一貫した対応が可能となるように、毎日情報交換を行いながら支援を進めた。

(4) 支援結果

午後のみの訓練プログラムを提示したことにより、開始後3ヶ月間は概ね5割の出席率で推移していたが、年末年始の長期休暇を境に、訓練への出席ができない状況となった。そこで、発達障害診療室担当医の意見を踏まえ関係者で話し合いを行った結果、睡眠覚醒リズム障害の疑いがあるとのことで、専門医への紹介が必要という結論にいたった。訓練は中止として、専門医への紹介を主治医に依頼するとともに、地域支援機関に対して情報提供を行い支援の依頼を行っていくこととなった。

6) R9

(1) 事例概要

中学3年時に、中学卒業後の進路検討を行う目的で国立秩父学園を受診、確定診断を受けた。高校卒業後、担任の勧めもあり福祉系の専門学校に進学するが、介護実習時の叱責がトラウマになったことや家族が適性について疑問をもったことから自主退学にいたった。国立秩父学園から本研究参加を目的に、埼玉県発達障害者支援センターを紹介された。

(2) アセスメント結果と支援課題

① 本人・家族の要望

本人：働きたい。汚れた物をきれいにする

仕事や物を仕分けする仕事がしたい

家族：本人の適性に合った仕事内容と本人を理解してくれる職場で仕事に就いてほしい。

② 生活リズム

家族主導による対応により、生活リズムは安定している。決まった生活パターンとなっているため、急な予定変更は難しい。あらかじめの説明と働きかけが必要。

③ 健康管理・身辺管理

健康管理に関しては、特に大きな課題はみられない。しかし、力加減の調整が難しく重い物でも軽い物でも同じ力加減で持ち上げる、終了の指示があるまで同じ姿勢で作業を続けるなど、身体への負担や疲労に対する配慮が難しい。

基本的な身辺管理は、決まったパターンでこなすことができるが、汚れが目立たないという理由で3,4日同じ服を続けて着用することがあるほか、食事場面においては、一口量の加減ができず、終始ほおぼってしまうなど、周囲からどのように見られるかに対する気遣いはない。

はさみやカッターなどの使用方法がわからない場合や実際にケガをした経験がない作業については、危険の予測が困難であり、刃の部分をも自分自身や他者に向けて作業をするなど、安全面への配慮ができない。

④ コミュニケーション・対人行動面

挨拶など、ある程度パターン化された対応は可能である。抑揚が乏しく、セリフを読み上げているような話し方であり、言葉遣いは相手にかかわらず丁寧である。状況や相手に応じて言葉を使い分けることは難しい。

簡単な指示は、口頭で可能であるが、説

明を聞く場合には比喩表現や冗談の理解は難しく、字義通りの解釈をしてしまう。また、相手の話の一部を捉えて誤った解釈をすることがあるため、どのように理解したか確認が必要である。文字表示については、省略形から正式名称を推測することが困難であるため、対照表が必要である。

よく知っている職員でも、想定とは異なる場所で会うと、同じ人物と同定できないため、ちぐはぐな会話になってしまうが、名札が同定の手がかりになりうる。

事故に関するニュースでは、実際の事故の悲惨なイメージがわからず、アニメが思い浮かび笑い出してしまうことがあるなど、笑いのツボが周囲からは理解されにくい。

⑤ パニック、こだわり

予定していた行動が急に変更となったり、予定がわからない状況が続くと不安が強くなり、パニックに至ることもある。また、過去の失敗体験がその前後に経験した別の行動と結びついており、その別の行動が想起されたのみでも不安が増強される。

⑥ 作業能力

a. パソコンの基本操作

パソコンの基本操作経験はあり、課題が理解できれば自ら開始することは可能である。

見本通りに入力する作業であれば、速度は速くミスも少ないが、自分で文章を考えて打つことは苦手である。

臨機応変な対応を求められる作業の遂行は難しい。

<初期アセスメント結果>

伝票並べ替え：8.5分/50枚

伝票チェック：126分/50枚(ミスなし)

漢字の読み：75%

入力速度：140-300字/10分

数値エントリ：94-98%、90-110個/10分

データエントリ：83%(10/12)、平均6.2分/枚

b. 郵便の仕分け、配達作業

体験したことがない作業については、口頭のみでの指示理解は困難。パターン学習されていることが多いため、本人が想定した以外のパターンについてはとまどってしまい、推測も困難である(例：「担当者様」と書かれた郵便物について、「担当者」が「様」の上に書かれているため、人名であると捉えてしまい、名簿から「担当者」を探そうとするなど)。

配達作業時に、相手や場面に応じた言葉かけや声の大きさの調整が難しい。また、他者と一緒に荷物をもつなど、相手とのタイミングを合わせる事が困難。

c. その他

はさみやのり、セロハンテープなど使用経験があれば、適切に使用することは可能。

見本がある比較的単純な課題であれば、指示されたとおりに取り組むことは可能であるが、適度なタイミングで手を止めることができず同じ姿勢で長時間取り組み続ける。また、自ら休憩を取ることは難しいほか、休憩時間においても同じ姿勢で手を止めて待つなど、リラクゼーションを自ら図ることは困難である。

⑦ 就労移行支援のためのチェックリスト(要支援項目 5段階評価で3以下)

- ・体調不良時に対処できない
- ・金銭管理ができない
- ・自分の障害や症状を理解していない
- ・その場に応じた会話ができない

- ・相手や場に応じた言葉遣いができない
- ・表情やジェスチャーでコミュニケーションができない
- ・他人と協調できない
- ・人と共同して仕事ができない
- ・就労能力がわかっていない
- ・危険に対処できない
- ・作業環境の変化に対応できない

⑧ 家族支援

家族は、本人の特性を捉えて様々な体験場面をもたせるなど、積極的な介入をしている一方で、対応についての負担感や将来への不安もうかがわれる。支援の方向性について、頻回に情報交換を行いながら、家族の不安軽減にも努める必要がある。

(3) 支援内容

① 生活支援

男性に対して「きれいな人」、高齢者に「汚い人」などと表現するなど、特に人に対する形容が不適切なことがあるため、実際の使用時にフィードバックし修正を行っている。また、人との約束の仕方など、実際の約束場面を設定しながら支援を行っている。

② 生活訓練

生活体験を増やすため、清掃、買い物、調理、手紙を書く、などの課題に取り組んでいる。過去に経験があることについては、理解も早く作業も可能であるが、過去のやり方にこだわってしまい、別のやり方を学ぶことが難しい。

② 職業訓練

・様々な作業体験

就労イメージを拡げることを行っており、パソコン入力、事務作業、軽作業、組立、クリーニングの各作業体験の機会を設定した。

・職場体験訓練（事務作業）

主として、ハローワークから送られてくる求人票のデータを入力する作業と伝票などをを用いた事務作業を実施。

R7と同様に、一度経験すると2回目以降の作業速度が向上する傾向がみられた。

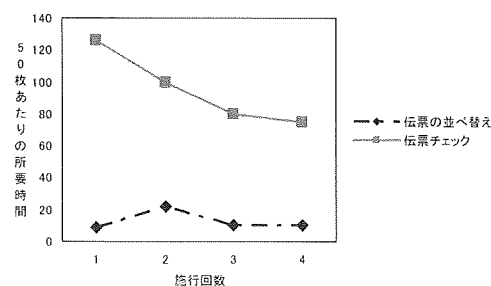


図5. R9 伝票課題における所要時間

・職場体験訓練（郵便仕分けおよび配達）

センターあての郵便物の一部について、仕分けから各部署への配達までの作業を担当。配達などの場面を通して、台車の操作方法、相手や配達時の状況に合わせた立ち振る舞い、言葉遣い、安全への配慮などについて、具体的にモデル提示しながら支援を行っている。

・その他

作業経験を増やすことをねらいとして、はさみやカッターを使用した作業、穴あけパンチを使用した書類のファイリング作業、シュレッダー作業などを実施している。ケガをした経験がないこともあり、刃物の扱いについて安全への配慮に欠く状況である。

集団作業として、日頃使用している控室の清掃作業を実施し、他者への配慮（他者の作業の妨げにならない）、協同作業（二人で荷物を持ち上げるなど）、作業工程チェック表の活用等の項目を取り入れて支援を継続している。

休憩時間や訓練終了後の時間の過ごし方に課題がみられたため、本人の興味がある活動を複数取り入れながら、休憩時間の過ごし方等について支援を行った。休憩時間における他の利用者との会話で混乱が生じやすいことから、これまでのところは職員が同席する形で対応している。

③ OT

身体バランスの取り方や調整力の向上をねらいとして、訓練を開始。物の持ち上げ方や様々な作業時の姿勢などについてモデルを示しながら支援を行っている。

④ 地域支援体制づくり

地域の障害者就業・生活支援センターに登録の支援を行った。今後は、訓練経過や課題などの情報を共有しながら、支援を進めていく予定である。

(4) 支援結果

字義通りに解釈するため、例え話や冗談の理解が難しいことや、理論的な説明の理解は困難であることについて、まずは支援者側に対して特性の理解を求めることが必要であった。今後は、他の利用者との会話場面における混乱について、どのように対応すべきか検討が必要である。

本人の特性が概ね捉えられてきたことから、今後は地域支援機関とも情報交換を進めながら、所外実習の機会を設定するとともに、就労マッチング支援を進めていく予定である。

D 考察

9事例の支援結果をもとに、考察する。

1) 就労を含む地域生活移行に向けては、アセスメントの結果、作業習慣の確立、就労イメージの形成、就職に必要な知識・技

能の習得などの職業的な課題のみならず、身体バランスや身体調整力などの身体機能面、セルフケアやコミュニケーション、余暇時間、危機管理などの社会生活力にいたる多様な課題がみられた。また、青年期になって確定診断を受けた者が多く、障害理解や自己理解において葛藤を抱えている事例もみられた。

2) 支援に際しては、これらの多様な課題を踏まえて、自立訓練、就労移行支援両面にわたる包括的なプログラムの準備が必要であると考え。場面や状況が変化することによって生活上の支援課題があとからみえてくることも多いことから、自立訓練から就労移行支援へという一方向的な支援の流れにはなじみにくいと思われる。そこで、自立訓練と就労移行支援について同時並行またはスパイラルに支援を展開できる仕組みが必要であると考えられた。

3) 生活リズムの状況が、訓練継続や支援内容の検討に大きく影響していることから、福祉サービスの提供にあたっては生活リズムの状況把握が重要であり、特に就労を目標とした就労移行支援の利用に際しては一つの判断基準になってくるものとする。

4) 多様な課題に絡めて、現実体験としての生活体験が極めて乏しいことが明らかとなった。また、個人内の能力のばらつきが大きいことや訓練を通して問題解決方略を学習してもその般化が極めて困難であるため、従来の技能習得を前提にした訓練体系では、効果が得られにくいことが示唆された。そこで、技能習得型の訓練体系から、生活と就労にまたがる多様な体験中心の訓練体系への転換が有効であると考えられた。

5) 本人の心理的葛藤に対しては、自己理

解に向けた心理教育プログラムの検討が必要であると考えられた。並行して、対応のわからなさや言動の受け入れ難さなどにより強いとまどいを感じている家族に対しても具体的な場面を通して障害理解への働きかけを行うとともに、成人に達した当事者に対する家族役割について家族とともに考えながら支援を進めていくことが不可欠であると考えられた。

6) 9 事例を通して共通、または類似した課題がみられる一方で、併存障害やコミュニケーション特性、こだわり、対人行動面、置かれてきた環境など、それぞれに特性や個人差が認められ、画一化した支援プログラムや支援ツール、支援手法を適用していくことは困難であった。また、支援内容が支援者の意図とは全く異なった支援結果を導くこともあるため、支援にあたっては、個別性を考慮していく視点が欠かせないとともに、モニタリングを通して柔軟に支援内容や支援手法の見直しを図ることも重要である。

7) 就労後の職場定着支援、生活支援については、開始されたばかりの段階であるが、個々の状況に合わせて地域支援機関との連携体制づくりをすすめながら、支援課題や支援方法について検討していくことが当面の課題である。

E まとめ

本研究においては、発達障害者支援センターを地域の核として、医療機関、自立訓練、就労移行支援、ハローワーク、障害者就業・生活支援センターによる地域連携体制の構築が重要な鍵になっていることが再確認された。

9 事例という限られた事例数ではあるが、知的には軽度障害から境界域にある者が大半を占めていた。今後の発達障害に関する福祉サービスの対象者層としては、これまで福祉サービスの対象となりにくかった、知的には軽度から境界域の者が多く含まれていく可能性が示唆されたと言える。想定される福祉サービスの対象者層として、さらに事例を集積しながら、支援プログラムの充実と見直しを図っていきたい。

F. 研究発表

論文発表

1. Kadota, H., Nakajima, Y., Miyazaki, M., Sekiguchi, H., Kohno, Y., Kansaku, K. Anterior prefrontal cortex activities during the inhibition of stereotyped responses in a neuropsychological rock-paper-scissors task. *Neuroscience Letters*, 2009 Mar 27;453(1):1-5.
2. Komatsu, T., Hata, N., Nakajima, Y., Kansaku, K. A non-training EEG-based BMI system for environmental control. *Neurosci Res*, 61: S251, Suppl .1, 2009
3. Takano, K., Komatsu, T., Hata, N., Nakajima, Y., Kansaku, K. Visual stimuli for the P300 brain-computer interface: a comparison of white/gray and green/blue flicker matrices. *Clinical Neurophysiology*, 120: 1562-1566, 2009.

更生訓練所の支援の流れ

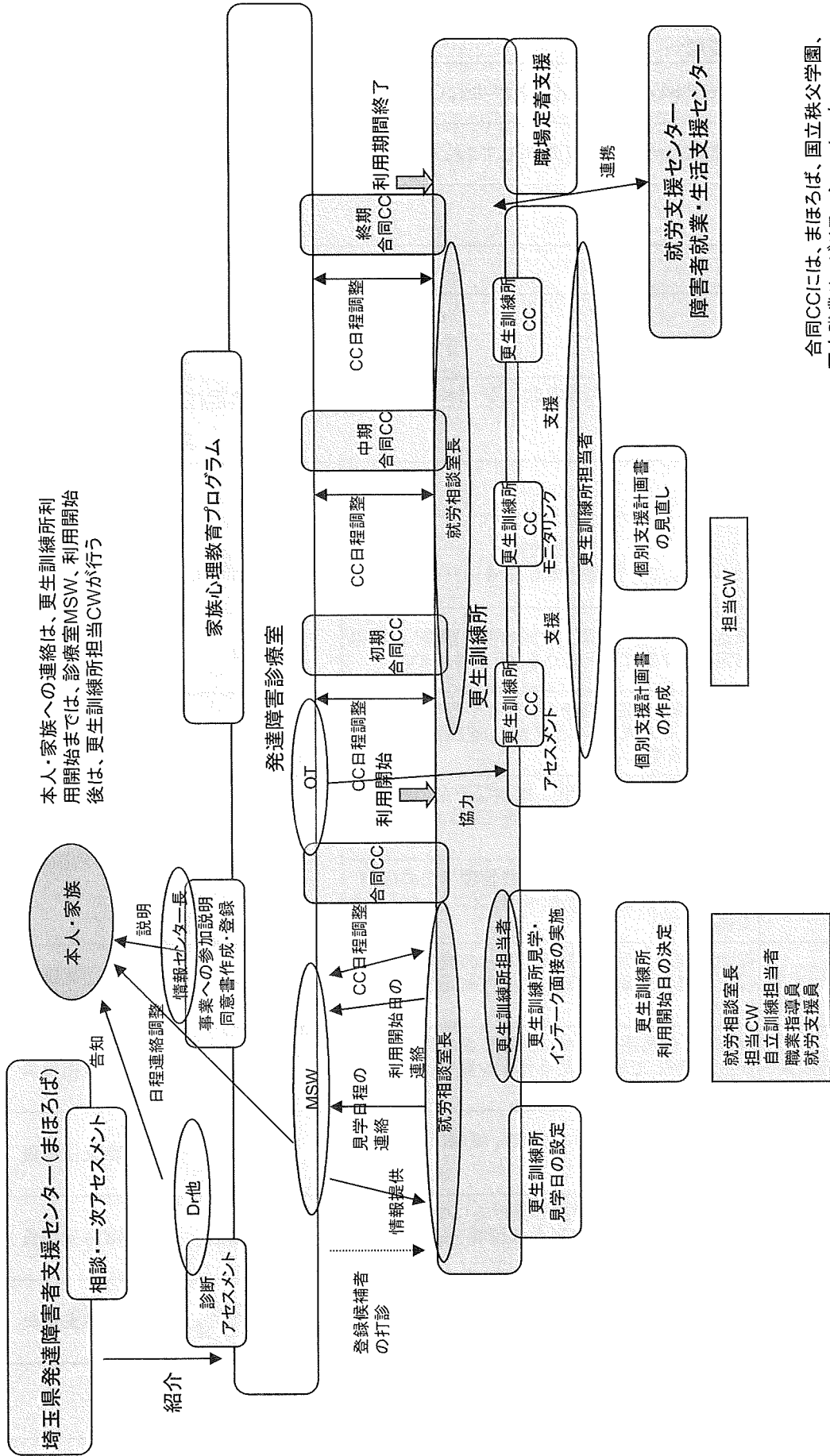


図1

個別支援計画書

作成年月日:平成21年 ○ 月 ○ 日

利用者氏名 R7 様

1 利用者及び家族等の要望

(1) 本人 人間関係でストレスを感じる事が少なく、長く働ける場所で働きたい。
(2) 家族 本人の適性に合う、本人を理解してくれる職場環境、勤務内容で仕事についてほしい。
(3) 備考

2 支援目標と課題

(1) 長期 (内容及び期間等)	就労 <div style="text-align: right;">期間: 9ヶ月間</div>
(2) 短期 (内容及び期間等)	自己の課題に気づき、対処法を学ぶ。職業適性を模索する。 <div style="text-align: right;">期間: 3ヶ月間</div>

3 具体的な支援計画等

目標実現のための支援項目・課題	支援内容 (内容・留意点等)	支援体制 (頻度・時間等)	担当職員	予定期間
生活リズムの安定	予定に合わせて就寝、起床時間を調整し、日中安定して作業に取り組めるよう支援します。	毎朝	生活支援員 日常生活訓練担当	H21年 ○月 まで
対人スキルの向上	相手や場面に応じた身だしなみや行動(敬語の使い方、声の大きさなどを含む)を調節できるよう支援します。	週1時間	作業療法士	修了まで
スケジュール管理	スケジュール帳を利用し、複雑な予定の整理や月単位のスケジュール管理をできるよう支援します。	週1時間	日常生活訓練担当	修了まで
金銭管理	単身生活を視野に入れ、金銭管理のための諸能力(金銭感覚、管理法)を身に付けられるよう支援します。			
職業選択方法の理解	就職面接会参加、企業実習などの経験を通し、様々な職種や雇用形態について知ることを目指します。	週1時間	生活支援員 就労支援員	修了まで
職業適性の模索	事務系、作業系の様々な訓練作業を体験しながら、継続して取り組める作業を見つけられるよう支援します。	3ヶ月間	職業指導員	H21年○月 まで
職業訓練	継続できる作業内容に基づき、就職に向け職業訓練を実施します。	6ヶ月間	職業指導員	H22年○月 以降
就職活動	履歴書作成や就職面接の受け方について支援をします。求職登録及び求人情報をもとに就職活動の支援をします。	求職登録後	就労支援員	H22年○月 以降
ネットワーク作り	就職に向けた支援と就職後の就労継続のため関係する機関のネットワークを作ります。	関係機関と 日程調整の上、適宜	就労支援員	修了まで

説明日: _____

利用者氏名: _____ 印

説明者氏名: _____ 印

1.事務的作業

R7<初回>

コピー

作業内容	評価			評価内容
	合	一部可	不可	
等倍印刷	○			
拡大・縮小印刷		○		パネル表示から推測できる
両面印刷			○	知識なし。推測できない

事務用品の扱い

作業内容	評価			評価内容
	合	一部可	不可	
はさみ		○		小刻みに動かすため、まっすぐ切ることが難しい
のり	○			
カッターナイフ		○		力の入れ方が弱く、小刻みに動かすため、切ることが難しい
セロハンテープ	○			時間を要するがまっすぐ行える
両面テープ	○			
穴あけパンチ(業務用)			○	穴を真ん中にあける意識がない
裁断機		○		一度教えるとできるが、紙をきちんと押さえることができずズレやすい
鉛筆削り	○			
テプラ			○	経験なし。予測できない
シュレッダー		○		電源の推測ができない
づぶりひもによるファイリング		○		紐がうまく結べない
ファイリング			○	ファイリングする向き等がわからない(自分なりの目印で合わせてしまう)